

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23650506

研究課題名(和文) 科学研究を伝える広報誌制作手法の追究

研究課題名(英文) Pursuit of methods in producing public-relations magazines in science

研究代表者

福井 康雄 (FUKUI, Yasuo)

名古屋大学・理学(系)研究科(研究院)・教授

研究者番号：30135298

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大学における理学広報誌の制作の現状と課題を整理し、今後の広報誌制作における指針を提示することを目標とした。主な成果は以下の2点にまとめられる(資料をウェブに掲載)。

(1) 2回の広報誌製作教室を開催し、広報誌政策におけるノウハウを整理・公開し、文章・デザイン制作等についての講義を行った。(2) これまでに名古屋大学理学広報誌に寄せられたアンケート結果を分析し、現場における問題点・課題を整理した。

以上の成果によって、今後の広報誌制作における一つの指針を提示した。

研究成果の概要(英文)：We analyzed the present state in the public-relations magazine on science from Nagoya University, aiming at presenting some guidelines for future public-relations magazines. The two main points of the present outputs are summarized as follows:

1. We organized two series of lectures on the public-relations magazine ("philosophia" of Nagoya University) and opened publically the lecture notes on writing, designing etc. 2. We analyzed the reactions from the readers of the public-relations magazine on science and summarized current issues in public-relations magazines.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学教育・教育工学

キーワード：科学と社会・文化 広報誌 サイエンス・ライティング 科学コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

大学等学術研究機関を巡る社会的情勢が厳しさを増す中で、科学研究を広くかつ深く社会に伝えることの重要性は、ますます広く認識されてきた。一例として、大型研究費取得者に公開講演を義務づけるなどの動きにつながっている。しかし、情報発信に積極的に関わる研究者は、研究者総体から見れば一部に過ぎず、大勢は依然として社会への情報発信に取り組みにくい状況におかれている。有効な情報発信手法についての系統的な研究はほとんどなく、研究者は個別に手探りで試行する段階にとどまっているのが現状である。より有効で現実的な情報発信手法を多くの研究機関が共有し、日々の研究活動の中で活用できる環境を整備することが急務である。

広報誌はもっとも多数の受け手に届けられる効果的の媒体であるが、講演会などとは異なり「読み続けてもらう工夫」が必要となる。名古屋大学大学院理学研究科は理学広報誌「理 philosophia」を2001年に創刊し、以来21巻の広報誌を発行して研究教育情報の発信を行ってきた。代表者は、「理 philosophia」の創刊と年2回の刊行の当事者として活動し、過去21巻の刊行に携わってきた。この広報誌の基本的なコンセプトは、基礎理学の神髄を分かりやすく、研究者の言葉で書き伝え、優れたデザインと仕上がりで「捨てる気にならない」広報誌とすることである。本広報誌は、時代を超えて優れた研究者の人となりや研究生活ぶりを紹介する「時を語るもの」、研究生活をめぐる種々のトピックスを読みやすく提供する「理のエッセイ」、公開講演会と連動させた最先端研究の紹介、名誉教授・留学生の座談会等で構成され、理学の全分野をカバーしている。編集にはプロフェッショナルの参画を積極的に活用し、株式会社電通が文章の整理・デザイン・印刷管理を担当して、プロのノウハウを活かした品質の高いものを目指している。2010年1月には、広報誌評価のために外部有識者による懇談会を実施し、広報誌全般についての意見を聞いた。出席者からは、本広報誌が国内広報誌の中で他に類のない質の高いものであり、基礎科学に基盤をおいて独自の境地を拓いていることが高く評価された。「是非このような広報誌は継続すべきである」、「よい意味で浮世離れしている」、「深みある基礎科学の真価の発信に役立っている」、などの評価を得た。同時に、最近数年間の企画の単調化についての批判など、改善すべき点も指摘された。このように高く評価された本広報誌の蓄積を、適切なタイミングで整理公開することは、広く研究者の情報発信活動を促進し、必要な光を広報誌製作に当てることができる。

これまでに代表者は、2004年度萌芽研究「大学から社会への情報発信の研究」(代表福井)を実施し、大学の系統的な取り組みが弱いことをアンケート調査によって明らか

にし、警鐘をならしてきた。公開講演会やサイエンスカフェ、一般向け書籍やエッセイ執筆など、アウトリーチ実践の経験も豊富である。さらに、双方向コミュニケーションの事例「宇宙100の謎プロジェクト」を分担者の齋藤らと協力して創出し、2回のESOF (Euroscience Open Forum 2008年スペイン・バルセロナ; 2010年イタリア・トリノ)での国際的展開も含め、この分野で成果をあげている。齋藤は、科学コミュニケーションを研究対象としてきており、その成果を、オンラインガイドブック「研究者のための科学コミュニケーション Starter's Kit」制作(共著)、学部生対象の「レポート書き方講座」や大学院対象の「ポスター制作の理論と実践」といった研修企画、大学院生およびポスドク対象セミナー「アウトリーチに取り組む」の講義などに活用している。以上の特色ある背景を生かした本研究は、国内事情に即した有効な成果を創出する高いポテンシャルを有する。

2. 研究の目的

本研究は、広報誌制作と改善の過程で蓄積されたノウハウの系統的分析・総合により、広く関係者が活用できるように情報発信手法を共有化することを目的とする。そのために、実践者の視点と分析研究者の視点を重ね合わせつつ、広報手法を探究するワークショップ・若手研究者向け広報誌制作教室等を開催し、ホームページ等に研究成果のポイントを整理し、持続的に情報発信を支援する基盤を形成する。

本研究は、広報誌制作と改善の過程で蓄積されたノウハウを抽出・体系化し、広く関係機関が活用できるように情報発信手法の共有化を目指した。そのために、実践者の視点と分析研究者の視点を重ね合わせ、自己分析や改善活動を通じて課題や手法を抽出するアクションリサーチ手法を用いた。広報誌研究のワークショップと若手向け広報誌講座の開催を軸に研究を進め、成果はホームページ等により公開する。なお、研究協力者として、広報誌制作を担当するデザイナーの小川明生氏、ライターの久野高義氏が参加した。

3. 研究の方法

過去10年間の編集活動を通して、広報誌制作についての多くの手法、知見、経験が蓄積されている。企画手法、文章の書き方、専門用語の「ほぐし方」、図の作成法、研究者特有の「こだわり」の調整など、その蓄積は多岐にわたる。

本研究では、基礎科学を発信する広報誌制作の手法を整理し、研究機関が活用できるようにポイントをまとめ、その成果をホームページ等に公開する。そのために、若手向けの広報誌制作教室2回を開催した。具体的には、以

下の項目について研究活動を実施した。

- 1) 研究組織内で、広報誌を取り巻く背景・環境、広報誌自体の全体像、記事ごとの意図や検討すべき事項をあげて課題を整理する。
- 2) 過去 19 巻に関するアンケートはがきの内容、学生に対するアンケートの回答の内容を分析し、読者層を特徴づけ、記事毎および全体像について編集意図とのズレや課題を把握する。記事の形態別(座談会、対談、講演記録、執筆記事、過去の研究を紹介する「時を語るもの」)に問題点・課題を抽出し、改善を進めるなかでガイドラインを整理する。
- 3) 広報誌制作教室を開講して、若手研究者を主対象に各種要素を実践的に習得してもらう。

以上の成果をホームページ等に整理した。

4. 研究成果

まず研究組織内で、広報誌を取り巻く背景・環境、広報誌自体の全体像、記事ごとの意図や検討すべき事項をあげて課題を整理した。

次いで、以下の項目について調査・研究を実施した。

1) 名古屋大学理学部広報誌「理philosophia」1号から19号までの広報誌アンケートはがきの内容、学生に対するアンケートの回答の内容を分析し、読者層を特徴づけ、記事毎および全体像について編集意図とのズレや課題を把握した。さらに、記事の形態別(座談会、対談、講演記録、執筆記録、過去の研究を紹介する「時を語るもの」)に問題点・課題を抽出し、改善すべき点、ガイドラインを整理した(ウェブ上の資料参照)。

2) 若手研究者を主な対象に、関連する各種要素を実践的に習得してもらう目的で、広報誌制作教室を2回開講した。1回目(平成23年9月12日)は、研究代表者福井、戸田山和久氏(名古屋大学情報科学研究科教授)、久野高義氏(株式会社コミュニケ)、小川明生氏(株式会社ティ・エム・シー)がそれぞれ、広報誌の企画立案、文章術、編集術、デザイン術について講義を行った。また、参加者23人に対してアンケート調査を行った。2回目(平成24年9月25日)は、渡辺正隆氏(筑波大学広報室教授)と田中佐代子(筑波大学人間総合科学研究科准教授)がそれぞれライティング術とイラストレーション術について講義を行なった(ウェブ上の資料参照)。

3) サイエンスアゴラに本研究を主題とする出展を行い、本研究の認知度を向上させるとともに、会場において多研究機関の広報担当者らと交流した。

最終的に、以上の成果及び資料をウェブ上に整理・公開した。以上の研究活動を通じて広報誌制作にかかわる諸問題を整理し、課題の共有化を推進した。

大学における学術的な広報誌の制作をテーマとする本研究は、他にほとんど例のない

ユニークなものである。本研究期間中に計6巻の理学広報誌他が発刊されており、本研究の成果がその中に生かされていることを付記したい。さらに、本研究は2013-2015年の挑戦的萌芽研究「宇宙100の謎」をモデルにした科学コミュニケーションの広範な展開(代表者 福井康雄)へと発展し、Facebookを利用したより広範なサイエンスコミュニケーションの新規活用が追求されている。

本研究で明らかになったように、現在の理学広報誌は、すでに理学に一定の関心を持っている読者を対象とするコミュニケーション手法である。一方、潜在的に理学に関心を持ち得る読者層が開拓されずに多数眠っている可能性がある。今後、科学におけるpublic outreachの研究推進の大きな課題は、これらの潜在的な読者層をいかに掘り起こし、理学研究の受け手層を拡大していくかという点にある。その意味で、Facebook等の新たなソーシャルコミュニケーションツールの活用を系統的に進めることは大きな意義があり、今後の研究の推進方策のひとつの重要な方向性である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福井 康雄 (FUKUI Yasuo)
名古屋大学・大学院理学研究科・教授
研究者番号：30135298

(2) 研究分担者

齋藤 芳子 (SAITOH Yoshiko)
名古屋大学・高等教育研究センター・助教
研究者番号：90344077

鳥居 和史 (TORII Kazufumi)
名古屋大学・大学院理学研究科・研究員
研究者番号：20444383

早川 貴敬 (HAYAKAWA Takahiro)
名古屋大学・大学院理学研究科・研究員
研究者番号：00413964

(3) 連携研究者

()

研究者番号：